

「世界の貝類館」見学の手引

齊藤岩雄

1 開館の主旨

温泉町芦原の高台、通称芦原ボーリング場内の一階に、すばらしい「世界の貝類館」が開設された。この館内に展示された貝の標本は約3000種という膨大な数である。これらの標本は、ある時は貝の奇人といわれ、また、貝の気遣いとまで噂された、貝の収集家として有名な故石森正孝翁が、終生かけて集められた標本の一部である。展示された標本の中には、今はもう絶滅してしまっている貴重な標本や、珍貝、稀貝といわれる標本も多く見られる。

この「世界の貝類館」を開設するについて、財団法人積善会（理事長加藤尚）では、翁が生涯かけて集めた貴重な貝が死蔵されていることを惜しみ、標本の保存と一般への公開をもくろまれた。また、標本を展示することで学校の児童・生徒にとっては、何よりの学習参考にもなるし、専門家にとっても研究資料の一助ともなるに違いないと考えられたからである。

2 石森正孝翁の略伝

石森翁と貝との関係については、すでに本誌17号（47～49P）で、北川俊一教諭が「石森・貝コレクション」と題して紹介されているので、重複する部分については略することにした。

翁は大正8年、日大法学部卒業後、貝に関係深い東京銀座の御木本真珠店に勤務した。ここで養殖真珠の内容や技術を理解した翁は、思い切って日本海でも養殖真珠を試みようと考え、さっそく帰郷して相談した。ところが家族一同の大反対をうけ、養殖真珠にかけた夢はあえなく消えてしまった。だが、貝にとりつかれた翁は、思い切って台湾へ飛び、台湾総督府に奉職した。大正14年である。翁はここで台湾の美しい貝を集めだした。ところが、奉職中に頭蓋骨打撲傷、脳内出血という大怪我をしてしまった。この怪我のため、翁は晩年まで苦しんだという。

昭和10年から17年までの8カ年間、沖縄本島に住み、怪我の養生を兼ね、専ら貝の採集に熱中した。沖縄諸島や奄美諸島の採集にあきたらず、遠く樺太や千島、あるいは朝鮮にまでも採集に出かけたという。

昭和18年、沖縄本島も戦場となってきたので、大切な貝を持って郷里福井県に帰り、三国町東尋坊に住み、国内での採集を続ける一方、多数の貝標本の整理に専念した。

昭和16年、那覇市泊沖の造礁珊瑚中から見つかったサンゴニナ (*Ishimoria lamellata* KURODA) は翁の発見した貝であり、貝類研究に努力された功績をたたえ、特に翁に献名されたものである。

石森翁は、たんに貝を採集し愛蔵したのみでなく、広く一般の人々の啓蒙につくしている。

昭和13年11月には那覇市公会堂で貝の個展を開き、その時の入場料は県へ送って、戦地への慰問費に寄付した。

昭和14年9月、自費で黒田徳米氏を招待して講演会を開き、また、同好者のために貝の名前を

つける仕事もしている。

また、閑院宮同妃殿下が沖縄に御来県なされた時、県の指名をうけて両殿下に貝の説明を申しあげ、かつ、翁の標本 200 点余を殿下に献上するという光栄に浴している。いうまでもなく、当時としては破格の光栄であり、翁の感激は言語に絶するものがあったであろう。

昭和 27 年大野公民館で貝の個展を開く。

昭和 32 年、石川県片山津小学校で貝を展示し、高松宮殿下の御供覧を賜わり、この時殿下から「今後とも精励するように」とのあたたかいお言葉まで賜わり、感激したという。

昭和 35 年 2 月 25 日、MRO テレビ放送に出演。

昭和 37 年 6 月 26 日～7 月 1 日まで、福井放送会館で「世界の貝類展・石森コレクション」と題して貝の個展を開く。

晩年の翁は、不自由なからだに鞭うって、何かと生涯かけて集めた自分の貝を整理して、完全な目録を作りたい。その完成までには数年かかるであろうが、目録ができるまでは死んでも死に切れないと、精魂込めて整理や目録作成に取りくんできたが、惜しくも、その業半ばにして、昭和 44 年 4 月 28 日永眠された。ときに 74 歳であった。

3 貝と人間

貝が地球上に現われたのは、今からおよそ 5 億 5,000 万年も昔の古生代—カンブリア紀とされているが、現在の貝類の先祖であるオウムガイやアンモンガイなどの最も栄えたのは、中世代のジュラ紀（約 1 億 6,500 万年前）から白亜紀（約 7,500 万年前）の時代である。ちょうどそのころは陸にも海にも、巨大な虫類の全盛時代であった。その虫類は現在小型化してワニ、カメ、ヘビなどと約 5,500 余種に分化して、生き続けている。貝はその後大いに分化発展して、現在 11 万 2,000 余種にも及んでいる。

いっぽう私たち人類の歴史は、せいぜい 100 万年といわれているから、貝に比べるべくもないが、その人類 100 万年の歴史のうち、99%は石器時代である。この石器時代に人々は山野、海浜をさすらい狩猟採取生活をおくっていた。いま先祖の貝を食べた殻は貝塚として発見され、その生活の一端を知ることができる。

日本の貝塚は放射性炭素 14 の測定によると、およそ 9,000 年も昔のものであるという。こんな昔から、今日に至るまで人間と貝とのかかわりあいが続いているのである。昔の人も貝を食用にするだけでなく、食器や装身具に用いていたが、現代人もブローチや首飾り、帯留、カフスボタンなどに貝を利用している。思えば、貝と人間とのつきあいは、本当に長い長い歴史が存在するといえる。

4 陳列の内容

私に加藤尚氏の意図によって貝の整理をお引き受けしたのは、昭和 48 年 4 月であり、開館まで 1 ケ年の歳月を費やした。翁の膨大な標本を整理するといっても、さきにものべた通り、一般に公

開し、主として児童、生徒の学習参考に供する目的での整理であったので、特に微小貝等は次の機会に譲ることとし、専ら大きな貝を中心に、一般の人が見て、美しい貝、おもしろい貝等を中心として選り陳列した。産地についても旧国名で記されていたのを、学習の便を考え、府県名に改めた。もちろん、東京といっても小笠原諸島まで含まれ、鹿児島といっても奄美諸島も含まれるので、これらは、東京（小笠原）、鹿児島（奄美）という書きあらわし方をしてある。

「世界の貝類館」に展示した貝は、学童の学習に役立つようにと、さきへのべた「貝と人間」とのかかわりあいを中心テーマの一つとして取りあげ展示している。ついで、専門家の研究や一般愛好者のための展示、そして今一つは、美しい貝のパネルも陳列した。以下順をおって説明しよう。

(1) 学童のために

「海にも山にも貝が何百、何千、何万種と棲んでいます。ですから、登山する時や、海岸を散歩される時には、注意してこれらの貝をとり、名前を知り、これを生活の面に利用することが、人生に課せられた義務ではないでしょうか。」

これは、かつて石森翁の言った言葉である。

貝は美しいといっても、残念なことに蝶や虫のように飛びまわることはできない。また、小鳥のように美声をはりあげて鳴くこともない。しかし、石のように丈夫なので放っておいても、虫に食われたり、腐ったりするものではないので、貝を自然のままでも楽しく鑑賞することができる。

世界の貝類館では、そうしたコーナーを設けて、貝と人間との関係を理解してもらおうと試みた。これらのコーナーについての概略を説明すると、

観賞用

このコーナーには、一般に鑑賞用として、あるいは装飾用として珍重されている大形の貝や代表的な貝を展示した。

宝貝類

宝貝は主として南海に棲んでいる。形もおもしろいし、色や模様も美しい。どの貝も磨いたようであるが、実はこれが自然の貝そのままの色である。昔はお金として用いた。お金として使った貝については、別のコーナーに説明も付けてあるが、あまり大きくないキイロダカラやハナビラダカラが主であり、この貝に孔をあけ、多少加工して用いた。中国では、殷（いん）時代、インドでは19世紀にもまだ用いていた。ニューギニアの奥地では、今でも貝貨を使っているという。お嫁さんをもらうのに貝貨500～600個持って行って買うという話である。わが国では、出産の時この貝を握っていると安産するといわれ、子安貝という名が付けられているが、江戸時代日本に多く入った子安貝はヤクジマダカラである。

芋貝類

美しい貝であるが猛毒を持っている。矢のような形をした毒矢を持っていて、音もなく静かに近づいてサツと発射する。矢はモリのように命中して獲物は殺されてしまう。人間もタガヤサンミナシヤアンボイナの毒矢にさされて死亡している。全くおそろしい貝である。沖縄ではアンボイナを

ハブガイといって恐れている。本当に見かけは美しいが、色や形ににあわない殺人貝である。

筍・筆貝類

形がタケノコや筆のようなのでこの名が付いている。タケノコガイやキリガイをみると、20回も30回もぐるぐると巻いていて、一体どこまで肉がつまっているのか不思議でならない。肉は先の方まで、ぎっしりとつまっているというから驚く。全くこの貝は高層建築家の代表であろう。

フデガイは形も全体としては小さく、手ごろな大きさであり、色も美しく、種類も多いので愛好者も多い。

珍しい貝

貝ほど自然の造形の妙を感じさせるものはない。自由な形、色のすばらしさ、どの貝をみても全く自然の傑作品である。

特にこのコーナーでは、奇抜なデザインを持った貝を集めてみた。学童の想像力を培う上においても、この自由奔放な貝のデザインは参考になることであろう。

南の海の貝

南国の海はさわめて色どりも豊かである。青く澄んだ海水、きらめく太陽、色とりどりのサンゴ礁、その間をぬって色彩豊かな熱帯魚が泳いでいる。こんな美しい海であるから貝もまた、大自然の美しさに負けず、色どりもあざやかで、さまざまな形をして棲んでいる。

北の海の貝

冬の長い北の海、それは灰色の海だといわれている。冷たい風や雪、荒波に耐えぬいている貝は南の海の貝と比べて全く正反対で、美しい色をした貝は棲んでいない。

市場の貝

貝は蛋白質食品として広く利用されている。殊に日本人は石器時代の昔から貝を食べている。ただ、市場へ出す貝となると、

- I 量の多いこと。
- II あまり手間がかからずにとれること。
- III おいしいこと。

このような条件にかなうものが主として市場へ出る。本県ではエゾボラモドキ、エツチユウパイ、パイ、シジミ、アサリ、ハマグリ、サラガイなどが、よく魚屋の店頭に出ている。

有害な貝

貝といっても数が多い。人間との関係からみると、有益な貝から有害な貝まで、それこそピンからキリまでである。

このコーナーでは、さきのにべたイモガイ類や養殖カキ、養殖真珠、アサリ、ハマグリ等を襲う有害な貝を展示した。そのほか、木造船に孔をあけるフナクイムシも貝の仲間である。

陸ではアフリカマイマイは形も大きく、それだけに植物の葉を多量に食べるので、果樹や野菜の大敵である。アフリカマイマイの生貝を日本国内に持ち込むことを禁止しているのもこのためである。

また、淡水貝ではカタヤマガイは日本住血吸虫の媒体として特に有名である。日本住血吸虫と日

本の名がついているので、日本だけの寄生虫と思っではいけない。中国、台湾、フィリピン、インドネシア、タイ、ラオス、カンボジアと東アジアの諸国にいる寄生虫である。

第2次世界大戦の時、フィリピンに上陸した米軍中に日本住血吸虫病患者が続出、その数1,700人以上、延30万人が戦線を離れた。現在では、予防対策も進み、カタヤマガイも、数年後にはなくなるといわれている。

(2) 一般展示品

かって黒田徳米博士は、日本の代表的な貝として、次の12種を選ばれた。

オトメダカラ、オオイトカケ、チマキボラ、オキナエビス、ギンエビス、マツカワガイ、リンボウガイ、テンニヨノカムリ、ニシキヒタチオビ、キンギョガイ、ヒオウギ、ハマユウ

これらの貝は全部が全部、珍貝、稀貝ではないとしても、日本の代表的な貝といわれている。これらの貝は全部展示しておいた。その他、珍稀の貝が多く展示してある。見ていただきたい貝が多くあることはいままでもない。

また、文学者好みのサクラガイ、ベニガイ、ワスレガイ、ホタテガイ、ツキヒガイ、ウメノハナガイ、トリガイ、アゲマキ、マテガイなど、また参考になることであろう。

現在のように観光開発が進み、道路が完全に舗装されてくると、自動車の排気ガスは生物を枯死させるばかりである。一方、農薬、工場廃液、海岸道路の整備、ビルの建設等による多くの公害によって、移動性のとぼしい貝のことであるから、生きていけない。しかも、こうした悪環境に適応する力も持っていないので、ただ絶滅への道歩んでいるだけである。もう、すでに絶滅した貝も少なくない。郷土の貝でも、例えば、トノサマガセルは大野でただ一ヶ所しか棲んでいなかったがダムによって水没し絶滅したのもその一例である。こうした貴重な貝は、今後いつ採集できることであろうか。

ここに展示された多くの貝については、それぞれの立場で、思い思いに鑑賞していただきたいと願っている。

(3) 貝の拡大写真

貝は目で見ても美しいが、これを写真にとって拡大してみると、また計り知れない神秘的な色彩や造形の妙にあふれていることがわかる。

今回展示した20枚の写真は、実物は4~5cmくらいの小さい貝であるが、見る人の目を喜ばせることであろう。写真に自信ある人は、いちど、このような貝の写真をとってみてはどうだろうか。また、それが縁となって、貝に深い興味と関心を覚えるようになればと願っている。

(4) 郷土の貝

郷土の貝については、まだ採集の歴史は浅い。明治35年秋、当時わが国の貝類研究の泰斗平瀬与一郎氏が、福井県で貝を採集されたのが初めである。

その後、小浜水産学校長平野茂吉氏が、嶺北では鯖江の医師古川田溝氏が熱心に貝を集めて

おられた。

昭和8年秋、天皇陛下が本県に行幸なされた時、県下の小・中学生が生物の採集をして天覧に供した。この時、貝は28,300点集まり、それを黒田徳米氏が整理された結果、430種の貝類標本ができた。(福井県生物目録、昭8) その後、窪田彦左衛門氏、室太吉氏など熱心な貝類収集家の努力で、昭和22年には840種の多くなった。(福井県産貝類目録第2版、1947) そして、現在では900種を超えている。今後もまだ新しく、次々と発見されていくことであろう。

石森翁の標本には、郷土の貝は大野産の陸貝が10種余しかないので、郷土の貝については私の標本を展示した。いうまでもなく、貝もまた地方地方で幾分色や形も違ったのが多く、初心者には南方の美しい貝を写真にとった原色貝類図鑑で、郷土の貝を調べてもなかなか一致しない。どうしても、郷土の貝は、郷土の貝標本を展示し、その貝をみて、自分の採集品を調べ、名をつけるのが一番便利である。また、世界の貝、日本の貝とも比べながら、郷土にはどんな貝が棲んでいるのか調べるのも、大切な研究であると思い、特に一般的な貝を中心として展示した。

なお、「郷土に関係ある貝」として

フルカワワラベマメウラシマ、カクレニナ、クボタシタダミ、フクイマメシジミ、エチゼンイツマデガイ、フクイシブキツボ、ニクイロシブキツボ、ツルガマイマイ、エチゼンビロウドマイマイ、ワカサツムパイ、サンゴニナ、カンムリレンズガイ等を特別展示した。

これらの貝は郷土の先輩たちや、貝の研究家たちによって発見され、これに郷土の名や郷土の採集家に献名された貝である。なおこのほかに、平野氏の発見になるヒラノマクラ、私の発見になるサイトウムギガイ等もあるが、標本がないので割愛した。

特に、ここに展示したカンムリレンズガイは、昨年発見された新種で、現在も県内の貝類研究家諸氏が熱心に郷土の貝についても採集を続けている何よりの証拠である。池田の冠山ブナ林中で発見された貝である。

(5) その他

今回の「世界の貝類館」開館にあたって、貝の名前を正確に調べていただいた東正雄先生(西宮市甲陽高等学校)には、特に珍しい外国の陸貝を多く賛助出品していただいた。また、鳥羽水族館からも世界の珍貝や陸貝の珍しい貝を賛助出品していただき、名実ともに、世界の貝類館にふさわしいものにすることができた。

5 むすび

石森正孝翁の貝類を展示するにあたって、東先生や鳥羽水族館から賛助出品をいただいたのみでなく、福井市郷土自然科学博物館からも、またカンムリレンズガイは、長谷川巖氏(南越中学校)の秘蔵の貝である。ここに記して深く感謝したい。

世界の貝類館に展示した貝の数や、その広さ等については、この館に勝る貝類館があるとしても充実した貝の展示内容、すばらしい施設、設備の完備等を考えると、こんな立派な貝類館は日本一であると自負している。

付 記

この原稿は開館前に書いたもので、実際の展示内容と一部くい違う場合も考えられるので、その点あらかじめ、御了承願いたい。

参 考 文 献

波部忠重著「日本の貝」新潮文庫 奥谷・竹村共著「日本の貝」講談社 内海(写真)・中村(文)共著「世界の貝」朝日新聞社 鹿間・堀越共著「世界の貝」北隆館 原色図鑑全集、波部・小菅共著「貝」保育社 ウイナス第4巻3号「福井県の貝類」 貝類学雑誌第31巻4号「福井県冠山産レンズガイ属の一新種」 福井県博物同好会会報17号 クラブにしのみや'73特集 九州の貝第2号「淡水産貝類と寄生虫病」